

まとめ

2025. 2. 4

学校では、よく“まとめ”という言葉を使う。1学期のまとめ、2学期のまとめの時期、大切な1年のまとめなどと使う。まとめとは、いったいどんなことをすることなのか。わかっているようで、よくわからない言葉の一つである。したがって、子どもの前でも、先生方に対しても使ってこなかった。唯一、使うことがあったのが、「研究のまとめ」である。

研究のまとめの場合は、何をするかがわかっている。研究作品、研究物、研究論文などを作成するのである。すなわち、形にするわけである。形にすることで、見えてくること、わかることがある。何事も、やりっ放しがよくない。まとめることで、成果や課題が見えてくる。

ところが、この形にするというのが容易ではない。4月からの実践を、研究のプロットに沿ってまとめていく。すなわち記述していくのが簡単ではない。頭ではわかっている。言葉にして説明もできる。だが、それを文字にして文章にしようとするとスムーズにはいかなくなる。

幼稚園でも、12月に研究のまとめの作業を行った。5月に行った実践を振り返りながら、プロットに沿ってまとめていった。「何でカプラにしたんだっけ?」「カプラだと～だからです」「今のを文章にすればいいんじゃないの?」「今、何て言ったんでしたっけ?」「いつも思うんだけど、録音しておけばいいんだよね」こんなやりとりが展開される。

文章にするのは、なかなか容易ならざることである。慣れも必要である。教育研究の分野で使う特有の用語やフレーズもある。目の前で、先生方が黙々とパソコンに向かっている。こちらは、待機の状態である。いつでも相談されれば、それに応える態勢をとっている。「それは、こういうことじゃないの?」と、先生方が実践してきたことを価値付けたりもする。

まとめの作業を考えると、気が重くなるかもしれない。だが、この作業を通して、何度も、子どものことを話すようになる。子どもの姿を追い求めるようになる。「もっと、こうしたいんだよね」先生方の思いもはつきりしてくる。それらを、みんなで共有していく。

思うに、研究のまとめというのは、先生方が教育や保育のことを考えるきっかけになっているのではなかろうか。だから、ああだ、こうだと話しながら作業を進めるのがよい。しかし、現実はそう甘くはない。各々が、沈思黙考の状態で、パソコンと格闘している。

まとめとして形にしてしまうと、それで終わりというイメージがある。そうではない。まとめた結果、見えてきた課題をどうするのか。次年度へ向けての構想を練るのが、この2月である。次年度のことを4月に考えていたのでは、後手後手となる。2月中に考えたことを具体化していくのが4月からである。それぞれの学校の研究のまとめが、有意義に活用されることを望む。